

## 生物学的製剤治療における病診連携

佐藤 正夫<sup>1)</sup>, 四戸 隆基<sup>1)</sup>, 馬場 岳士<sup>1)</sup>, 角田 恒<sup>1)</sup>, 清水 克時<sup>2)</sup>

関節リウマチ (RA) に対して, 生物学的製剤の使用が可能となり, RA 患者の ADL, QOL は飛躍的に向上した. しかし, 生物学的製剤の使用に関しては, 重篤な副作用が発現する頻度が高いことや生物学的製剤が高価であることなど, 専門医以外の開業医 (診療所) ではその使用が困難な場合が少なくない. 当院では, 近隣開業医との RA 治療連携システムの構築を3年間にわたり行ってきたので, RA 症例数の推移, 抗リウマチ薬 (DMARD) や生物学的製剤の使用状況等について検討した.

### 対象および方法

2005年4月, 当院に日本リウマチ学会指導医, 専門医各1名の人事異動があったのを契機に同年9月, 日本リウマチ学会教育施設認定を取得した. 2005年5月の時点での外来診療録でRAの保険病名が付けられている症例をすべて把握した. 近隣の開業医 (整形外科医, 内科医) を中心にRA患者に対する早期治療の重要性を説明する目的で講演会, 懇話会を開催して, RA患者の当科への紹介を依頼した. 日本リウマチ友の会岐阜県支部共催による, RA患者および家族を対象としたリウマチ講演会, 医療相談会を随時開催した.

### 結 果

2005年5月, 当科で加療中のRA患者は73例, DMARDを処方されていた症例は34例 (43.8%) であった. 10ヵ月後の2006年2月では, RA患者は116例, DMARD使用患者が101例 (87.1%) に増加した. 2007年8月現在, RA患者は161例で149例 (92.5%) にDMARDが処方されている. 使用しているDMARDの内訳は, 2005年4月, 2006年2月, 2007年8月の順で, メトトレキサート (MTX) が9例, 34例, 62例, プシラミンが16例, 44例, 56例, サラゾスルファピリジンが8例, 21例, 44例で, これら3剤

が第1選択薬として投与されているのが現状である.

生物学的製剤の使用状況 (累計) は, 2005年4月, インフリキシマブ (INF) が4例であったが, 2005年2月ではINF 12例, エタネルセプト (ETA) 14例, 2007年8月では, INF 31例, ETA 27例の計58例に達した. 2008年3月末日現在, この病診連携の活動を開始して3年経過した時点で, INF 40例, ETA 32例, 計72例である (図1). 各々の症例の紹介患者割合は50%以上を占めた (図2).

### 考 察

RAの治療では, 早期に適切な診断を行い, 早期にDMARDを十分に使用することがガイドラインで推奨されている<sup>1)</sup>. さらに, DMARDで効果の得られない症例では生物学的製剤を躊躇せずに使用し, 早期RAに対して診断早期から生物学的製剤を使用することで疾患の寛解状態を得ることが可能であるとの報告もあり, DMARDのみならず, 生物学的製剤を積極的に使用することでRA患者のQOLを改善しようと多くの専門医は考えている. しかし, DMARDや生物学的製剤には高い有効性の半面, 重篤な副作用や薬価が高いなどの課題があり, 専門医以外の医師における薬剤使用については困難であることが少

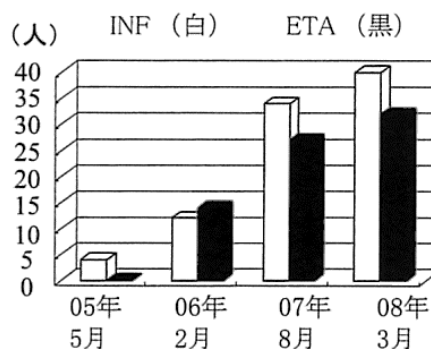


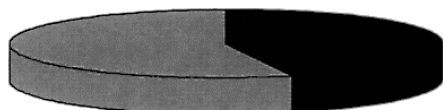
図1 生物学的製剤処方症例数の推移

Cooperation between a hospital and a medical office in the treatment of rheumatoid arthritis patients : Masao SATO et al.  
(Department of Orthopaedic Surgery, Nishimino Welfare Hospital)

1) 西美濃厚生病院整形外科 2) 岐阜大学医学部整形外科学教室

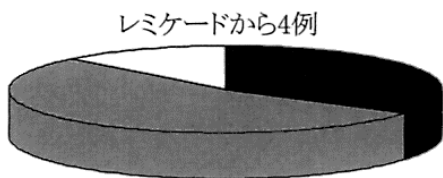
**Key words :** Rheumatoid arthritis, Biologics, Cooperation between a clinical office and a hospital

## INF 施行症例 40例



紹介 22例(55.0%)

## ETA 施行症例 32例



紹介 17例(53.1%)

図2 生物学的製剤施行症例に占める紹介患者

なくない。

今回の検討から、リウマチ専門病院を中心に病診連携システム構築を行えばRA患者の集約が可能で、DMARD、生物学的製剤の使用に関してはある程度の成果が得られたと考えられた。MTXに関してみれば2005年4月の時点で73例中9例(12.3%)にしか処方されていなかったのが2007年8月では161例中56例(34.8%)となり、約3分の1のRA患者に処方されるに至った。リウマチ専門施設でのMTX処

方率は、アメリカで約50%、中東諸国では29%という報告がある。生物学的製剤の使用に関してはアメリカで約40%、中東諸国では2%とされている<sup>2)3)</sup>。当院における生物学的製剤使用率は、この2年4ヵ月間で約5%から約35%に増加しており、病診連携システムが良好に機能した結果である。RAに対する集学的治療には、各地域において、リウマチ専門病院を中心とした病診連携システムを構築することが重要であると考ええる。

## 文 献

- 1) American College of Rheumatology Subcommittee on rheumatoid arthritis guidelines. Guidelines for the management of rheumatoid arthritis. 2002 update. *Arthritis Rheum* 2002 ; 46 : 328-346.
- 2) Michaud K, Wolfe F. Trends in medication use by 10, 982 rheumatoid arthritis patients in the United States from 1998-2005 : biological use now 40%. *Ann Rheum Dis* 2006 ; 65 : 311.
- 3) Humeira B, Ooi KK, Tak PP. Rheumatoid arthritis in Dubai—delayed diagnosis and low usage of disease modifying antirheumatic drugs. *Ann Rheum Dis* 2007 ; 66 : 835.